2024年11月の総評に代えて　　高橋修宏

**旅人が白鳥の影を売る**　　**長谷川柊香（宮城県）**

旅人が売るものは、「白鳥の影」。けっして「白鳥」そのものではない。そこに、あえかな抒情が立ち上がる。と同時に「売る」の一語に注目すると、われわれが売り買いしている、その多くが実体ではなく、「影」なのではということにも気づかされるのではないか。

**おうごんの**
**うぶげに**
**頬をまもらせて**
**土偶のようにいもうとねむる**　　**さいう（石川県）**

何よりも、「土偶のように」という直喩が新鮮。縄文時代の「土偶」自体は、その造形から成熟した女性の形象化されたものであるが、ここでは「いもうと」という幼形をめぐる比喩へと転じている。「おうごんの／うぶげ」という修辞と相俟って、ある聖性さえ感じさせる。

**そぞろ寒ケロイド色の国境線**　　**杢いう子（佐賀県）**

言うまでもなく「ケロイド」とは、皮膚の火傷などのあとにできた瘢痕が増殖し隆起したもの。広島や長崎の原爆をめぐる写真集などで、数多く目にしたこともある。そして、人の手によって引かれた「国境線」も、ことごとく戦争などの災厄によってもたらされたことを、われわれは何度でも想起すべきなのだろう。まさしく、「そぞろ寒」――。

**今朝までわたしは殺されなかった**
**燃えるゴミの日だから**　　**羊夏生（東京都）**

この作品の「わたし」は、不燃物なのだろうか。あえて「わたし」という人称を用いることによって、「わたし」＝不燃物をめぐる人間中心の世界の不条理が立ち上がるようだ。

**冬構え画鋲落ちなくなるまで刺す　　神崎まい（群馬県）**

まず、この一句に書きとめられた不毛とも言える振るまいに立ち止まった。もちろん「画鋲」は、壁などに「刺す」ものだが、「落ちてなくなるまで」と時間性を含んで記されることで、にわかに、えんえんと続く不毛さ自体がクローズアップされるような気配である。

**天国の花　ずっと咲くから淋しい　　金光　舞（埼玉県）**

かつて、「天国」とは退屈な場所なのではないかと記した詩人がいたが、やはり地獄などと比べても「天国」のイメージは、在り来たりのものになってしまうのかもしれない。ずっと咲きつづける「天国の花」――。「淋しい」という呟きが、そんな凡庸な「天国」のイメージにも向けられているようだ。

**たましいの**
**抜け道になる**
**蔦からまる　家　　りんか（埼玉県）**

私の散歩道の途中にも、「蔦からまる」古い家がある。その前を通る時、つい歩を緩めて眺めてしまう自分がいる。何故、立ち止まるのか。何故、気になるのか。「たましいの／抜け道」という言葉が、どこか腑に落ちる修辞となっている。

**君が代は千代ちゃんと半ぶんこ**　　**牛田　悠貴（東京都）**

やはり「君が代」と言えば、日本の国歌の〈君が代は千代に八千代にさざれ石の‥‥〉を連想するが、この一句では脱臼され「千代ちゃん」になっている。続く、「半ぶんこ」もユーモラス。既存の権威に対する、アイロニカルな笑いを誘い出す一句。

**誰かの看守と**
**誰かの囚人を**
**兼任する街**　　**ルイ・アナン（千葉県）**

一読、ディストピアとしての近未来小説のような雰囲気を誘発する作品。だが、すでに、そんな不穏な世界へと、われわれの現在は向かっているのかもしれない。

**雨夜に返す**
**博物誌**
**森の奥から**
**輪転機の音**　　**ともよ（北海道）**

静謐な抒情が立ち上がる作品。「雨夜」、「森の奥」、「輪転機」など、選びぬかれた言葉の一つひとつが、響きあいながら、ある架空の「博物誌」をめぐる上質なポエジーを届けてくれるようだ。

**電話が鳴るたび、**
**知らない誰かが消える気がする。**　　**秋山　幸久（滋賀県）**

この「電話」は、忌報なのだろうか。いや、二行目「知らない誰か」と記されることで、単なる忌報ではなく、「電話が鳴る」こと自体が、忌まわしいことであるような気配が漂う。どこか、不条理なミステリーのような作品。